

社会委員会通信

24

2006.9.3

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

2006年の平和聖日は、広島に原爆が投下された日と同じ8月6日でした。四竈揚牧師(千代田教会)をお招きし、「平和を創り出す わたしの被爆体験から」というテーマで、広島に原爆が投下された時のこと、ご家族のこと、そして原爆がその後の人生に与えた影響についてお話をうかがいました。

本来許されぬ戦争にあって、更に超えてはならない限度があります。戦闘員と一般住民を区別しない無差別大量殺戮兵器や不必要な苦痛・被害をもたらし、長く人体に苦痛を与え、自然環境を破壊するような兵器を使わないという基本的人道上のルールです。

講演後、話し合いの中で、戦時中のこと、終戦後のこと、更に空襲のこと等、多くの貴重な体験談を聞くことが出来ました。

戦後61年、全国民の4人に3人は戦争を知らない世代です。もちろん、学校で習うこともありません。これからの世代へ、日本の歴史の負の部分も含めて、戦争のこと、原爆のことを語り継いで、平和を創り出す者の1人になればと思います。参加者は69名(男性17名、女性52名)でした。

(社会委員長：F.O)



平和学習会；平和を創り出す わたしの被爆体験から

講演要旨

千代田教会牧師：四竈 揚

はじめに

この集会では、「平和を創り出す わたしの被爆体験から」というテーマでお話をさせていただきます。昨年10月に神奈川教区婦人委員会と東湘南地区婦人委員会との共催講演会で同じ話をさせられましたので、私の話をお聞きになった方がここにいらっしやると思います。あの時は原稿を婦人委員会に渡したものですから、事前に印刷された原稿を皆さんが見ていらっしやる所で話をしたのです。その原稿どおりの話ではちょっと気が引けますので、今日はその中で「私の被爆体験」と「姉の死」の二つにしばってお話させていただきたいと思います。

私の被爆体験

その日の朝

今日はちょうど8月6日で、61年前のこの日のことでした。その日は月曜日でした。私は、その日の朝8時ちょっと前に、急に決まった勤労作業の場所に行っていました。それは広島市役所の周辺です。兵器廠や被服廠、県庁とか市役所など主な建物の周りは木造の建築物が多く、類焼を防ぐためそれらの家屋を全部壊して燃えるものをなくすのです。強制的に立ち退きをさせて建物を取り壊し、その後始末のために町内の婦人会とか女学生や中学生が動員されて、片づけていたのです。

瓦は瓦、柱は柱というように材料を区分け整理して、出来るだけ空間を作る作業をさせられていたわけです。それは急に決まるものですから、前週の金曜日頃「月曜日は授業がないので、市役所前に集まれ」という命令が来ました。当時中学は5年制で、3年生以上は別の軍需工場に動員され、授業は1年生と2年生しかありませんでした。それで1年生は別の場所で勤労作業、2年生は5クラス全員250人ぐらいが皆市役所の周りに集まっていた。

私が8時ちょっと前に集合場所に着いたら、0君に「四竈君、先生が伝令に行ってくれと言っている」と言われました。中学校は市役所から15分ぐらい離れた場所にあります。その頃は夏休みがなく、交替で1週間ずつ休むことになっていましたから、前週休んだ人は月曜日の作業を知らずに学校に出て来ます。ですから、その連中に「今日は授業がなく、市役所の周りで作業だ」と知らせ、引率して再び市役所に戻って来るように、という命令でした。

私は、何でそんな役が私に当たったのかと思いました。学年250人のうち、20人ぐらいが作業になったことを知らずに学校へ集まって来るので、それを連れて来い、というわけです。「よりによって貧乏くじが当たったものだ」と本当にその時は思いました。スコップと弁当を持って中学校へ行きました。



原爆投下の瞬間

学校には6人ぐらい集まっていた、「もうちょっと集まったら出かけよう」と言っていた矢先でした。教室は教壇の右側がグラウンドに面したガラス窓、左手が廊下で、出入口が前後にあります。私が教壇席に座り、「今日は授業がないんだ」と話をしていた時、運動場側の窓際がピカッと光ったのです。すごい光で、ちょうど写真のフラッシュの何千倍か何万倍のものを目の前でたかれたようなものと言ってよいかもしれませんが、上手く表現出来ません。とっさにパッと伏せました。

その光る直前、K君が教官側の入口から「お

はよう」と言って入って来ました。その途端に光ったのです。光だけでなく、その熱風で校舎は倒壊してしまいました。1階建ての木造校舎は頑丈に造られていましたが、屋根に押しつぶされてぺしゃんこになりました。

屋根瓦や壁土で文字通り生き埋めになった私は、一瞬気が遠くなったのだと思います。「学校に爆弾が落ちたぞ！みんな無事か？」と怒鳴る者がいました。それで「四竈は生きていますぞ！」と言いながら、屋根瓦と壁土に埋まった中から少しずつ這い出し、やっとのことで外に出ました。学校に爆弾が落ちたから、周りの人が助けに来てくれるのではないかと期待して、外に出ました。ところが驚いたことに、外は暗くなっているのです。原子雲が太陽を覆って、日食のようになっていました。そして至る所に火が燃えていました。あれは熱線ですから、燃えるものは類焼ではなく、同時発火します。学校は市役所よりも南側にありますが、その周りにはもう全部燃え始めていました。

グラウンドに出て数えてみたら、ちょうど6人いるのです。全員出てこられたのだなと思いました。1人窓側にいたN君は、ガラスが顔や体に突き刺さり、血だらけになっていました。6人の中で、彼が一番先に死んだと後で聞きました。

もう火がそばまで来ているものですから、このままでは学校も燃えてしまうと思い、とにかく南の方へ逃げようということになりました。周りはウーンという声です。「お母ちゃん」とか「助けてー」とか「痛いよー」という声がウーンと鳴っているのです。その中を人がみんな逃げて来ます。

その行列に加わって逃げようとしたのですが、私はその時、「これから必要になるから、弁当とスコップは持って逃げよう」と言って、みんなに倒壊した校舎の下から、それぞれの弁当を探させました。私も屋根の下から弁当箱だと思って取り出そうとして、ぎくっとしました。それは即死したK君の頭だったのです。K君はちょうど原爆が落ちた時、教室で立っていました。私たちは座っていました。その頃、避難訓

練はよく出来ていて、校舎がつぶれた時、私たちは無意識に伏せたのですが、机が多少クッションになったのだと思います。彼は教室に入って来たばかりで立っていましたから、直撃で即死です。私が原爆で死んだ人を間近で見たのは、K君が最初です。即死ですし、大きな梁の下ですから、どうすることも出来ませんでした。私はその時からだんだん無感動になってきました。無感動と言うか、不感症と言うか、どんな死人を見ても、びくともしなくなっていました。

すごい行列でした。赤ちゃんを抱えているお母さんとか、兄弟を呼んでいる人とか、外にいた人はみんな火傷をしています。夏ですから、男も女も半裸体で真っ黒になって、泣きながら出て来ます。途中、馬が大きなお腹を見せて死んでいました。そのような所を通して南に逃げ延びたわけです。それは本当に地獄絵でした。

市役所の周りにいた同学年の250人は、外で作業を開始したばかりだったようです。教師も生徒も全員亡くなりました。その場では生き残った者も、一番長く生きた者でも、ひと月ぐらいい後に亡くなりました。2、3日で亡くなった人もいます。

いろいろな人の話を聞くと、原爆はパラシュートで落とされたのです。「あ、パラシュートだ!」と、みんな見ていたらしいのです。それが上空500mぐらいで炸裂したのです。それはただの爆弾ではなく熱線を伴っていますから、外にいた人はみんな火傷を負いました。誰でも3分の1火傷をしたら助からないと言いますが、ほとんどが全身の火傷です。

家屋は木造が多く、それが全部倒壊して、すぐ火が付き、すぐに燃え始めました。私がいた中学校は少し離れていたことと、決定的なのは、私達は校舎の中にといたため、熱線を浴びなかったことです。それで助かったのです。市役所の周りにいたら、私は今こうして生きていません。伝令に1人だけ行かされたことが、生と死を分かたつことになったのです。今でもそれを思うと、厳粛な気持ちになります。

この後、何日かにわたって、私は何百人、何千人という死んだ人や死にかけている人々を目

撃するのですが、K君の頭を梁の下に発見した時の衝撃が一番大きかったように思います。

私はそれ以来、どうしても私でない出来ないうちのことだったら、頼まれたことは断るまいと決心するようになりました。何で貧乏くじを引いて学校に行かされるのか、と心の中でぼやきながら行ったのですけれども、それで命が与えられたということは、いろいろなことを頼まれても、軽はずみに断るまいと思っています。それで神奈川教区婦人委員会と東湘南地区婦人委員会の共催講演会も今日の集会もお断り出来なかったのです。そんなに嫌なら、なぜ断らないのか、と言われそうですが、それを使命と思っているわけです。

みんなで南の方に逃げ、最後は広島湾の河口まで出ました。軍の将校が「どの船にでも乗っていけ」と言うものですから、私たちは小さな伝馬船に乗り、対岸の吉島に渡りました。当時の吉島は飛行場でしたから、類焼の危険がないと思って、大抵の船は吉島に渡しました。ちょうど引き潮でしたから、そのまま広島湾の中のいくつかの島にまで行った船もあったと聞いています。しかしその島の大半はその後、死体を焼く巨大な火葬場になりました。

原爆はまず熱線でやられます。人間はそれで火傷します。建物の中に入ら、火傷はしませんがつぶされます。つぶされてK君のように即死する場合もあるし、身動きが出来ないうちに火が回ってくる場合があります。辛うじて建物の中にいて助かり、這い出すことが出来ても、次にその人たちを悩ましたのは、原爆症です。白血病になるわけです。原爆は、何重にも人を殺す効果的な、残虐な兵器です。

私たちが逃げる途中、何人かの級友が走って帰って来ました。その連中は寄宿生で、市役所の周りで作業中に被爆し、学校の隣にある寄宿舎まで帰れば何とかかなったらしいのです。けれども、学校も寄宿舎も倒壊している。そこはもう火の海に近い状態ですがっかりしていたのですが、びっくりしたのは、誰が誰だか分からないのです。同じ学校の中学生ということは分かるのですが、火傷で顔が大体2倍か3倍にな

っているのです。帽子だけちょこんと被っています。海坊主みたいです。「君は誰だ？」と尋ねて名前を言われるまで、誰が誰だか分かりませんでした。

「水、水」と言うので、水筒を持っている者が飲ませたのですが、「水を飲ませては駄目だ。すぐ死んでしまう」と言う人がいました。水を飲んで、事切れることがあるのです。でも私は今でも、どうせ死ぬのだったら、水を飲ませてあげないといけなかったのではないかと申し訳ない気持ちがしています。火が収まってから、私は市内に戻って来ました。友達はみんな西の方の家で、市内に家があるのは私だけだったので、みんなと別れ、電車道を通って焼け跡の中を帰りました。私の父は牧師だったので、広島教会の焼け跡に向かったのです。この後のことは長くなるので、割愛させていただきます。

原爆の悲惨さ

原子爆弾はまず熱線による火傷、そして倒壊した建物による圧死、焼死、最後は放射能によって、文字通りこれでもか、これでもかとばかり幾重にも命を奪うようになっている大量殺戮の兵器なのです。しかも、現在の水爆による核兵器は、当時の広島の際の原爆に比べると、何千倍もの破壊力を持っています。少なくとも21世紀には、核兵器廃絶ということが世界規模で採り上げられなければなりません。

狂乱した一握りの人によって、核兵器がどこかで使用されたら、必ず報復爆撃が行われるでしょうから、ニューヨークにしる、東京にしる、全くの廃墟になってしまうことは明らかです。私たちは、地球の壊滅を防ぐために、核兵器の廃棄を人類の英知から実現しなければなりません。

北朝鮮がミサイルの実験をしたり、パキスタンやイラクが核兵器を手放さないことは、全世界の危機です。もちろん、核保有国(アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮)の責任は大きいものがあります。日本も、日本でなければ

発言出来ないような核兵器廃絶のために努力しなくてはならないでしょう。

この問題の解決の答えは和解しかありません。教会はいと小さき群れです。しかし、真の平和の君として来たりたもう主イエス・キリストを信じているキリスト教会の責任と課題の大きいことを思います。どんなに小さくても、私たちの平和への祈りと努力が全世界の核兵器の廃絶に繋がり、戦争の否定、暴力の否定に繋がっていくのだと思います。



家族の再会

当時、私の家族がどうだったかと言うと、両親のほかに姉と弟2人の6人家族でした。小学5年生と3年生の弟は広島の郡部に疎開し、広島市には私と姉と両親がおりました。「太郎は父のふるさとへ、花子は母のふるさとへ」という歌がありました。今でもあれを歌うと、切なくなります。

姉は女学校の4年生(今の高1)で、広島女学院の生徒でした。私は中学2年生でした。父は広島教会の牧師だったのですが、その日、広島市の東北部にある県立盲学校でお話をすることになっていたため、朝早く出かけてその学校にいました。爆心地から遠く3kmぐらい離れていました。

母は牧師館にいたので、爆心地から1.5kmぐらいでした。牧師館は大きな建物の横にあるレンガ塀の奥まった所にありました。母は新聞を取りに出たのですが、新聞を取って帰る途中、大きな鉄筋の建物の陰だったため、光に遭わなかったのです。レンガ塀に押しつぶされたものの、軽傷で助かりました。

姉は広島女学院の生徒でしたが、学校が鉄道局に接收されていて、女子挺身隊として学校で作業しておりました。広島女学院は今でもありますけれども、爆心地から500mぐらいだったのです。私の中学校は1.5kmぐらいでした。原爆で助かるかどうかの決定的な点は、爆心地からどれくらい離れていたかによります。大体爆心地から500m以内は全滅です。姉は比較的至

近距離にいたのですけれども、カードボックスが倒れてきて、頭に10cm×10cmぐらいのL字型の傷を負いました。

ばらばらにいた家族がどうやって一緒になったかと言いますと、私も父も母も焼け跡にみんな行ったのです。そして消し炭で「揚無事」とか書いておきます。行く先を書いておくと、その後母が来て、また書く。それでお互い消息を取り合いました。

しかし、姉の消息は全然分かりませんでした。爆心地の近くの学校にいたらしいと聞いて、手分けして何日もかけて探したのですが、なかなか分かりませんでした。今も問題になっているのは、爆撃の後、市内に入り歩き回った人が放射能でやられていることです。後で死体の処理に来た人も随分亡くなったようです。

姉を探して「今日見つからなかったら、もうだめだ。弟たちのいる所に帰ろう」と言った日に学校へ行ったら、女学院の生徒の何人かがある小学校に収容されているという貼り紙がありました。それで母と2人でその2つの小学校を訪ねたのですが、どちらにも姉はいませんでした。小学校は仮収容所になっていて、講堂にござが敷かれ、その上に負傷者が転がされていました。そのような状態で死んでしまった人もいました。傷口にうじが湧いている人に、あるだけの油薬を塗ってそれでおしまい、というような収容所でした。

どちらの収容所にもいないので、もうだめだと思っていたら、母が急に「そう言えば、このあたりにHさんという友達がいたはずだ。ひょっとしたら、この小学校に収容されてそこからHさんの所へ行ったかもしれない」と言い始めました。それは全く天啓のようなひらめきです。Hさんの家はすぐ分かりました。

母が「ごめんください」と声をかけても、シーンとしています。2度目の呼び声の時、「あっ、お母ちゃん！」と泣いて起き上がって来たのが、頭に包帯をした姉でした。後で聞くと、自分の家は全滅だろうから、今の呼び声は夢みたいなものだと思って、最初の時には返事をしなかったが、2度目の声で目を開けたら、玄関に母の

姿を見出したのだ、と言って泣きじゃくるのでした。姉はその前日、高熱で危なかったそうです。しかし何と言っても、生きていたのです。私たち家族4人は、大勢の死者や行方不明の人がいる中で、ともかくみんな廃墟の中で再会出来たのです。涙を流して共に感謝の祈りをするほかありませんでした。

弟たちが疎開していた県北の農家は、無一文になった一家4人が、けが人も含めて転がり込んで来たのですから、本当に大変だったと思います。いろいろなことがありましたけれども、弟は最近になって、「あの頃は血膿のついた包帯を毎日川に洗濯に行った」というようなことを話してくれるようになりました。小学校5年生でしたが、「俺でないと出来ない」と思って、誰にも言わずにそんなことをやっていたのですね。それでも、一家全滅とか、6人家族の中で3人死んだとかはざらでしたから、6人とも無事に会えたことは、本当に感謝すべきことでした。

それからの日々は、養蚕場に罹災している家族ですからどうすることも出来ないのですが、6人揃ったということで、私たちにとっては、何か夢のような幸福な日々でした。そして間もなく戦争が終わりました。それからは農村の生活です。昔「わが谷は緑なりき」という映画がありました。炭鉱の良い時代に家庭がばらばらになってしまったという話です。半月ほどでしたが、家族一緒に讃美歌を合唱したり、励まし合ったり、その頃は私にとってちょっぴり「わが谷は緑なりき」でした。

8月15日に戦争が終わりました。その時、私は父と共に広島市にいました。罹災した教会員の消息を尋ねるためです。昼頃、戦争が終わったというニュースを聞きました。私はどこへ憤りを持っていったらよいか分かりませんでした。今でもその情景が浮かびます。生きている人も死んでいる人も川岸にごろごろしていました。そういう被災者がいっぱいいるところで、戦争が終わった、日本は降伏したと知らされた時、何のためにこれだけの人の犠牲があったのか、というやり場のない憤りを覚えたのです。実は、今でも私は夜になると、寝言を言ったり、

叫んだりするようです。おそらく随分深いところで被爆体験は私のトラウマになっているのだと思います。



姉の死

そのうち、「原爆症」という言葉が巷の人の口の上のようになりました。大体、原爆に遭った人や焼け跡の整理に行った人は、急に発熱し、頭髪が抜け、歯茎から出血し、体に紫色の斑点が出る、そうなったらもう助からない、という噂が広がっていました。白血病です。姉はその通りの手順で亡くなりました。ひと月後に急に39度か40度になり、1週間苦しんで亡くなったのです。時々ちょっと痛みが和らぐ時がありましたが、その時「私はこうして家族に囲まれて看取られているからいいけど、誰も周りにいなくて死んだ人や苦しんでいる人が気の毒だ」とか「もしも私が元気になったら、お父ちゃんを助けて伝道する」など、親を泣かせるようなことを言っていました。父は姉の死の近いことを知って、近くの教会の牧師に来てもらい、幼児洗礼を受けていた姉に信仰告白をさせ、聖餐に与らせました。

9月4日、私たち家族は代わる代わる姉と話し合ったり、冗談を言い合ったり、お祈りをする時間が持てました。その夜は何となく姉が少し元気になったような気がして、私たち3人の弟は階下で寝ていました。12時少し前、母が慌ただしく2階から降りて来て、姉が死にそうだと告げました。私たち3人は養蚕室の2階に駆け上がりました。そして父に抱かれてまさに召天しようとしている姉に対面することが出来ました。姉の名前は佑子と言いますが、姉が「佑子、佑子って呼ぶ声が聞こえるのよ」と言うので、父が「それはイエス様の声だから、はっきり返事なさい」と言ったそうです。すると姉は上体を起こしてほしいと言って、父に抱きかかえられると、そのまま天に召されたのでした。

サムエル記には、サムエルが主に呼ばれた時、祭司エリが「『主よ、お話ください。僕は聴いて

おります』と言いなさい。それは主の声なのだ」と教える箇所があります。それと同じように、「自分の名前を呼ばれた時に、ちゃんと返事をしなさい」と父が言ったのです。

私は、神様を信じる者は誰でも、最後はこのように主が名前を呼んで召してくださるのだ、と思います。そして、それに返事をしてイエス様のところへ行くのだらうと思うのです。

がんの末期とか、高齢だったりすると、実際に名前を呼ばれ、実際に返事をしていても、そのことを声に出して伝えることが出来ませんが、姉の場合はまだ若く、最後まで意識がありましたから、それを伝えることが出来たのだ、と思います。これは私の推測ですが、私たちはみんなイエス様に名前を呼ばれて天国に行くのだと思えば、死はそんなに怖くないですね。

この姉の死は、私たち家族の一人ひとりに重い課題と恵みを与えてくれました。私を含む男の子3人は、それぞれ時をおいて信仰告白をし、クリスチャンになりました。次弟は私と同じように大学を出てから神学校に入って牧師になり、現職の牧師のまま先年召されました。彼にとっても、姉の死が大きな契機になっています。末弟は現在もある教会の長老として、忠実な働きをしています。父はそれまでも増して伝道と牧会に専念し、原爆記念日には、広島教会を隠退した後も毎年必ず広島の慰霊祭に出席していました。両親はそれぞれ10年前に召天しましたが、80歳を超えるまで元気だったことは感謝すべきことです。

被爆直後は、私も両親もそれぞれ原爆症になりました。白血球は極度に減り、歯茎から出血し、頭髪が抜け始めました。家族も「次は揚だな」と覚悟したようです。しかし私どもの場合は、それぞれ奇跡的に助かりました。ただ猛烈な無力感と言うか、虚脱感は特別でした。私は半年この村でぶらぶらし、翌年中学校から授業を再開するという知らせを受け取って、1月から級友数名と教師の家で補講を中心とした合宿を始め、ようやく中学2年を終えました。



母の信仰

母は姉が亡くなってから、ずっと短歌を詠んでいました。そのほとんどは姉の死に関するもので、神様に向かって嘆き、訴え、怒り、泣く、というような、まさにヨブ記を思わせる内容の歌をワラ半紙にずっと書き続けていました。17歳で亡くなった姉の死だけでなく、広島市の惨禍も神様のみ心としては分からない、せめて歌に詠もう、と毎日何首か書いておりました。ところが、母は亡くなる2、3日前、私たち子供が病院へ行った時、ひと言「神様のなさることに何一つ間違いはなかったよ」と言ったのです。それを聞いた私たちは、あれだけ愚痴や嘆きを綿々と書き綴っていた母が、自分たちよりずっと深い信仰に達したのだと知って、感銘を受けました。



神との出会い

最後に私自身のことを少し申し上げたいと思います。誰が考えても死ぬべきところを生き残ったということが、後々まで私の大きな課題となりました。長い煩悶の後、「私が生きていて何かしなければならぬことがあるからこそ、神様は私を生かしてくださったのだ」と思うようになり、信仰告白をしてクリスチャンになりました。

「私が神を知る前から神が私を知っていてくださったのだ」というガラテヤ書の言葉（4章9節）が心に響く言葉となりました。しかし正直に申しますと、私は牧師にまでなるつもりはありませんでした。自分では牧師には向いていないと思っていましたし、父の姿を見て、「とてもあんな牧師にはなれない」と思っていたからです。

しかし、自分でやりたい勉強をするために入った大学でしたが、卒業する時にもう一度この問題が迫って来ました。キリスト者として生きるだけなら、それは当然のことだが、それでは何か中途半端ではないかと思いはじめたのです。「ただのクリスチャン」と言ううちちょっと変ですが、普通のクリスチャンとして生きるだけだ

ったら、多分自分も仕事に就くかもしれないし、家庭をもつかもしいない。教会では何かお役をして、みんなと良い交わりを持つかもしれない。そのために生かされたというのでは、ちょっと中途半端で調子が良すぎるのではないか、と思うようになりました。

それで大学を卒業した時に神学校に入ったのです。そして牧師になり、44年経堂北教会の牧師として仕えました。70歳を超えたのですが、あと数年なら働けると思って、4年前から千代田教会に移りました。来年の3月ぐらいまでは働くつもりであります。

「元気になったら、お父ちゃんを助けて伝道する」と言った姉の言葉も大きな刺激になりました。広島教会の青年会の中から神学校に行く人が現れたことも影響を与えられたことでした。決定的だったのは、詩編118編17節の言葉です。「死ぬことなく、生き長らえて主の御業を語り伝えよう」という言葉が迫って来たのです。こうして私は東京神学大学の3年に編入学し、大学院を終えて牧師になりました。



私たちの命と課題

広島や長崎の原爆による殺戮は、非戦闘員が平穏な日常生活の只中で大量に虐殺されたという点で、アウシュビッツやダッハウにおける強制収容所のユダヤ人虐殺と並ぶような事件であることは確かでしょう。地震や津波などの天災による死者は大抵数千人です。ところが東京大空襲の死者は10万人以上、負傷者11万人と報じられています。広島の場合は死者20万人と報じられています。天災よりも人間による空襲や原爆による殺戮がずっと大規模であることを思います。もちろん死者の数だけで計ることはありませんが、人を殺すための兵器が次々と発明され、その最先端に核兵器があることに人類の罪の極点を見る思いがします。

原爆から生き残ることを許された者にとっての大きな課題は、平和を創り出す者として生きることであり、原爆の悲惨さを通して人間の罪を指摘することだと思えます。最終的には「真

の平和の君」である主イエス・キリストによる平和しか世界の平和はないことを思い、私自身は牧師となりました。

平和を脅かすものは人間の罪です。広島爆心地に建てられている原爆碑には、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」という文字が刻んであります。これは出来た時からいろいろ議論がありました。「原爆を落としたのはアメリカだ。広島としては『過ちは繰り返させませんから』と書くべきではないか」と言うのです。しかし、これは誰かが誰かを糾弾する言葉ではなくて、人類全体が二度と原爆は使わないという意味で「過ちは繰り返しませんから」という言葉にするべきだ、ということで落ち着きました。

戦争に対しては、広島も長崎も加害者の一人だったという立場からでなければ、平和へのアピールをする説得力があるとは思えません。日本が先に原爆を作っていれば、日本は必ずそれをうけていたに違いないからです。

フィリピの信徒への手紙の4章7節に「あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るであろう」と書いてあります。つまり、私たちが自分たちの力で平和を守っていくのではなくて、神の平和が私たちを守ってくださると書いてあるのです。人間的には平和を実現する道がどんなに困難であっても、道が遠く見えようとも、まず神の平和が私たちを守り支えてくださっているのです。それだから、キリスト者の平和運動は希望を失いません。

誰が考えても死ぬべきところを生かされたという経験と課題を持っている私は、今年75歳を迎えます。もちろん今日は自分がこのように歩んできましたということを宣伝したり、自分が幸運であったことを自慢するような話をし

ているわけではありません。

私が神学校に入った時には、白血球が異常に少ないため、「勉強を続けることは心配だ」と病院の先生に不安がられたこともあります。一般に白血球が3,000以下になると治療が必要ですが、その時は2,000以下になっていたのも、病院の先生が心配したのです。

私が被爆者であるということで、結婚する時には妻の母親がうんと心配しました。今でも私たち夫婦は、私たちの子供たちの家族の健康が気になります。孫たちにどのような遺伝的障害があるか分からないからです。私は、自分が生かされたということ、様々な場面で強く意識させられるのですが、ある時子供たち（息子と娘）に原爆の話をしました。そうしたら息子が「お父さんがその時死んでいたら、僕たちは生まれていなかったんだね」と言いました。改めて「ああ、本当にそうなのだ」と思いました。自分の命だけでなく、この子供たちの命も神様から与えられたのだ、ということをしみじみと実感させられました。

私は、私たちのどんな一人ひとりも神様が愛してくださっており、一人ひとりにその人でなければ出来ない使命を与えていらっしゃるのだ、ということをしみじみと思います。誰もその生涯には限界があります。どのように生きても、その人の一生は一生です。しかし私たちはその中で死と罪に打ち勝ってくださった主イエス・キリストによって復活の希望に生きています。私たちはそれぞれに与えられている賜物を感謝しながら、その生涯において神様が会おうことを許してくださった仲間や友達と一緒に生きる祝福が与えられているのです。私の話を聞いてくださった皆様が、それぞれの人生を貴重なものと受け止め、一人ひとりが平和を創り出すような生き方が出来るようにと心から祈ります。

社会委員会からのお知らせ

次回の学習会は10月1日(日)に開催します。講師は「港南台9条の会」の宮良幸宏氏、テーマは「沖縄から平和を考える」です。多くの方々のご参加を期待しています。